

元気に声を出し合おう（４年）

あ り

●指導目標

言葉の使い方を工夫して，読み，話し合い，書く。

○ナンセンスなありの様子を想像しながら，そのイメージの中に自分たちがいるように，言葉のリズムや調子を工夫して音読する。（読む）

○『あり』の詩の表現形式や考え方を生かして，「ありっこない詩」を作り，発表し合う。（書く）

●教材について

1 教材設定の意図

４年生ともなると，子供たちは自立心や仲間意識が強くなり，想像世界や認識世界にも広がりや深まりを見せはじめる。本教材は，そのスタートとなる４年生の学級開きで，楽しく想像し合うことで心の響き合いを，楽しく音読し合うことで声の響き合いを学級につくり出すことを意図している。

その意味で，春になった喜びを全身で表現するためにオノマトペ（擬声語や擬態語）を駆使し，春の喜びをいっぱいにうたいあげている『春のうた』，そして，自由な想像の楽しさやものごとをとらえる発想の転換のおもしろさが自然に伝わってくる『あり』の詩は，意図にぴったりである。

詩は，短くて手軽に読めるものではあるが，長文の散文と同等にその作品世界は独立し完結しており，言葉がつくり出す詩の心は広くて深い。また，散文が意味性を基調とするのに対して，詩は五感を中心とした感ずる心としての感性を基調としている。そのだれもがもっている感じる心こそは，自然や社会の事物や現象をどうとらえるかという認識する力を高めていく始まりと考える。

この詩との出会いを出発点に，年間をとおしていろいろな詩との出会いを国語の時間ばかりでなく，いろいろな場や機会を意図的に設定し広げていきたい。

2 たしかに豊かに読むために

詩を読むことにも多くの言葉の力が要求される。それはまた，詩を読むことをとおしてたくさんの言葉の力をつくり，他の学習に生かすことができるということでもある。そこで，詩を自力で読むことをめあてに，次の三点を指導の原則として取り組みたい。

- 1) 繰り返し声に出して読むこと：言葉の響きやリズム，詩の心を音読で表現する。
- 2) 言葉や表現技法にこだわって読むこと：詩の心や想像世界は技法に支えられている。
- 3) 詩の心を深める観点をもって読むこと：詩の心のベースとなる見方や考え方。

3 「あり」（作・ロベール＝デスノス）について

1) 対話形式で繰り返し音読する

この詩の音読は，一人で音読するよりも，二人が対話形式で音読するほうが数倍楽しい。また，全員で音読する場合も，二つに分かれて，対面して音読すると，各連の想像上のありさんの姿が強く浮かびあがって提示される。また，最終行の「ほんと！ でもそんなありさん なぜいないんだろ？」という反語表現が，「いても，いいよね」とか「いたら，おもしろいよね」という心の言葉も導きやすい。

2) 言葉や表現技法にこだわって読むこと

一見ナンセンスな言葉遊びの詩で、連構成や対句的な繰り返し、対話的な語り口以外目だった技法は使われていない。ただ、想像上のありさんを連ごとに三種提示していることには留意したい。

3) 読み深める手立て

四年生の子供たちの知識や認識の広がりには、一方で思考や判断の類型化や一般化、常識化へと流れやすい危険性をはらんでいる。金子みすゞの『ふしぎ』の詩ではないが、自然や社会のできごとや現象の多くを、何の不思議もないあたりまえのこととして受け入れてしまい、疑問や問いを抱かなくなっていく曲がり角にたっているように思えてならない。だからこの詩を、このような転換期の子供たちの心に一石を投ずるような、心にひっかかるような与え方として次のようにしてみたい。

「だれがいる？」と問い、各連のありさんを人物化する。

町を散歩してたら？ こんなありさんがいたら？ 話しかけてきたら？ など、場面や状況を設定して、自由な想像を発表し合う。

「『あり』ってどんな生き物？」と題名読みで取り上げ、この詩の題材がありであることの必然性を探る。

ロベールさんが想像したありと現実にいるありと対比するために、ありについて見知っていること（ありの小ささ、形状、力持ちで勤勉な様子、集団性や社会性等）を発表し合い、著名なシュール・レアリスムの詩人でありながらユダヤ人として迫害を受け、収容所で獄死したロベール＝デスノスの状況とありを重ねてみる。

すると、小さくても懸命に生きているありの姿と作者や民族の姿が、そして、大きな悪に立ち向かえる本当の大きさややさしさ、強さや賢さ、すべての人が心を通いかわし、理解し合うことを渴望した作者の祈りが「ほんと！ でもそんなありさんなぜいないんだろう」という終わりの詩句に結実したと考えることもできるのではないだろうか。しかも、その語り口には戦いを挑むような激しさはない。ユーモアたっぷりに笑い飛ばしているのだが、もう少し、詩句を詳しくとらえてみたい。

まず、一連のありさんは、「頭に帽子かぶった」という表現からもおだやかな紳士然とした表情のありさんで、十八メートルという大きさは作者や平均的なヨーロッパ人のほぼ十倍であり、それは人間の十倍の大きさといっている。体が十倍であることは心の大きさも十倍、そんなありさんを思い描いているのではないだろうか。

次に、二連のありさんが引っ張っているのは、身近なアヒルと遠い南極にいるペンギンである。世界中の生き物（人）のために、みんなの心を乗せて引っ張っていくありさんでありたいという願いにも思えてくる。

さらに、三連のありさんが話せる言語は、まず身近なフランス語であり、ヨーロッパ圏の言語の母体となったラテン語であり、アジアのジャヴァ語である。言葉は心を伝え合い、互いに理解し合うことができる、人間だけがもつ手段である。過去の英知も現在の世界中の人とも心通わす言語をたくさんもっているありさんとは、平和や幸せを祈り続けているありさんと考えることができるのではないだろうか。

そんなありさんになりたい、そんなありさんがいたっていい、いや、そんな小さくて弱いが、たしかで豊かなありさんのような人間がたくさんいてほしいとする願いをこそ、この詩の心として受け取りたい。

以上のような読みは、少々突っこんだ読みであり、四年生の子どもたちに、これをそのまま提示することは適切ではないかもしれない。しかし、繰り返し音読し合うことや、自分でも作者のように「ありっこない詩」を書いてみることで、この詩の言葉が子どもたちの心のどこか

に引っかかり、いつの日か自分への問いとなって蘇ってくる日があることを、作者とともに祈りたい思いである。

それは、私たち人間の普遍的な祈りでもある。一見ナンセンスで語呂合わせだけの詩のように見えていて、やはり詩は、人間としての思いや願いや祈りを結実させたものなのだということが実感できるのである。

「絵を描いてみよう。」と、各連のようなありと自分が何かをしている絵を描き、吹き出しをつける。特に、ありさんの表情や言葉に留意させたい。

「ありっこない詩を書こう。」と、「あり」の詩の形式や考え方を生かして創作遊びをする。

(1) 作者のように「こんなありさんがいたら」と考え、「ありっこない詩」を作る。

(2) 「こんな〇〇さんがいたら」と考え、同じように「ありっこない詩」を作る。

小さく、弱く、不自由な生き方や差別を運命づけられているような生き物や物へ心をよせた「ありっこない詩」を書く。

・かえる ・ミミズ ・木 ・雑草 ・へび ・石ころ ・毛虫 ・ごきぶり …

●学習指導計画（全２時間）

教材名・時	学 習 活 動	留 意 点
春のうた (１時間)	1, 題名読みをする。 2, 繰り返しやオノマトペ等の技法を生かして音読する。 3, 前詞や詩から、かえるがどこにいるのかを話し合う。 4, 3を受けて音読を工夫する。 ・一人で音読 ・対話的な音読 ・班で群読 5, 全員で群読する。	・春という季節について。 ・声の強弱，高低，抑揚等。 ・状況と思いを重ねる。 ・声の重なりや響き合いをつくる。 ・最後に全員で群読する。
あり (１時間)	1, 題名読みをする。 2, 音読を工夫する。 ・一人で音読 ・対話する音読 ・班で群読 3, 音読発表をする 4, 「ありっこない詩」を書いて発表する。 5, 作者について知る：生き方を知り，別な詩を読む。	・現実のありを思い描く。 ・声の強弱，高低，抑揚等。 ・かけあいを楽しむ。 ・工夫点を強調する。 ・自由な想像を楽しむ。

● 本時の展開 「あり」(2 / 2)

○ 目標

- ・ナンセンスなありの様子を想像しながら，そのイメージの中に自分たちがいるように，言葉のリズムや調子を工夫して音読する。
- ・『あり』の詩の表現形式や考え方を生かして，「ありっこない詩」を作り，発表し合う。

○ 展開例

学 習 活 動	指導上の留意点・評価及び方法
1 題名読みをする。 アリについて知ってること，思ってること。 ・小さい ・黒い ・食べ物を運んでいる ・働きアリや女王アリがいる ・働き者 ・行列をつくる ・巣は土の中 … 2 『あり』の詩を提示する。 1) 何度か自由に音読し，気づいたことや思ったことを発表する。 ・おもしろい詩だ ・こんなありがいたら大変 ・三種類のありさんが出てくる ・四つの連 ・一連のありさんがいたら乗ってみたい ・「あり」と「ありっこない」のありが同じ ・だじやれの詩みたい ・句読点がない 2) 二人で，読むパートを決めて対話音読をする。 ・ A 各連の想像のありさんを読む。 ・ B 終わりの「そんなありありっこないさ」を読む。 ・いっしょに最終行を読む。 3) 全員が二つに分かれて群読する。 3 班で連ごとの分担を決め，詩を視写し，ありさんと自分が対話している絵や吹き出しをかく。 ・三種類のありさんを想像して自由に楽しくかく。 グループで発表する。 4 「ありっこない詩」を書き，発表し合う。 1) 「ありっこないあり」の詩 ・自転車に乗るありさん / 車や電車を運転するありさん / そんなありありっこないさ… ・山の上から / スキーですべるありさん / … … 2) グループに分かれて，ありさん以外で，こんな〇〇さんがいたら楽しいな，というのを見つけて連詩を作る。 一人一人が作った詩をつなげて，一編の詩にする。	○形状，大きさ，集団性や社会性，よく見かける姿など自由に発言させる。 【関】見聞きしたことや体験したことを，積極的に発言しようとしている。(発言) ○音読しながら，気づいたことや音読記号などを詩に書き込む。 ○内容だけでなく表現や形式にも気づかせる。 ○ラテン語やジャヴ語について説明する。 ○抑揚，間のとり方，声の強さなどを工夫させる。 【読・言】抑揚や間などを工夫して，情景が浮かぶように音読している。(音読) ○おおげさな読み方も工夫する。 【読】二人で相談しながら，音読が楽しくなるような工夫している。(対話音読) ○男女等で，パートを交替して音読する。 ○学習プリント(B 5 の用紙) にかく。 【書】ナンセンスなありの様子を想像しながら視写し，絵や吹き出しを書いている。(学習プリント) 【書】詩の形式を生かして，「ありっこないあり」の詩を書いている。(学習プリント) ○できれば，小さい物，弱い物，不自由な物を選んでグループで作る。 ○時間がたりない場合は，発展的な取り扱いとして，家庭学習等で取り組ませてもよい。 【書・関】詩の形式を生かして，「ありっこない

作った詩の発表会をする。 5, 作者のロベールさんについて理解を深める。 ・生涯や生き方について紹介し, 作者の別の詩『ペリカン』の読みきかせをする。 ・感想や思ったことを発表する。	い詩」を作り, 班で協力して音読発表をしようとしている。(ノート, 音読発表) 【関】作者のとらえ方やありの詩について, 理解を深めようとしている。(発言)
--	--

○評価

- ・情景を楽しんで詩を読もうとしている。(態度)
- ・ナンセンスなありの様子を想像しながら, 音読を工夫している。(読む)
- ・自由に想像しながら「ありっこない詩」を書き, 発表している。(書く)

●参考資料

1 ロベール・デスノスの詩

ペリカン ロベール・デスノス	ジョナタン船長は、 十八才。 ある日、極東のある島で ペリカン一羽つかまえる。 ジョナタンのペリカンは、 朝、真っ白な卵を生み落とす そしてそこから、一羽のペソカン おどろくほど似た奴が顔を出す。 この二番目のペリカンは 今度はそいつが、真っ白な卵を生み落とす そしてそこから、これは当り前のことだけど 同じことをする別の一羽が顔を出す。 こうしたことは、いつまでも長くつづくに違いない もしも人間が、卵のうちにオムレツにしてみわかないなら。 「窪田般彌・訳『フランス現代詩29人集』(思潮社)より」
------------------------------	---

2 児童作品1(「ありっこない詩」)

ありっこないありさん

- ・空をとぶありさん
外国をりょこうするありさん
- ・べんきょうがとくい
ぼくのしゅくだいをやってくれるありさん
- ・サッカーすき
だんがんシュートきめるありさん
- ・時そく六十キロ
ぼくを学校までのせてくれるありさん
- ・エースで四番
ホームランをどんどんうつありさん
- ・コックさんのぼうしをかぶり
レストランでおいしい料理を作るありさん
- ・ぴよんぴよんとんで
なわとびをするありさん
- ・本を読むありさん
教室でみんなといっしょにべんきょうするありさん
- ・犬をつれて
まい朝さんぽに行くありさん

3 児童作品2(「ありっこない詩」の連詩)

木

二班みんな

森の運動会で

動物といっしょに走っていく木

そんな木ありっこないさ そんな木ありっこないさ

いつも立っててつかれるから

夜は横になってぐうぐうねむる木

そんな木ありっこないさ

本をよむ木

マンガやテレビを見てわらう木

そんな木ありっこないさ そんな木ありっこないさ

ほんと！ でもそんな木 なぜないんだろ！

かえる

三班みんな

ジーパンはいてサングラスかけて

デパートへ買い物に行くかえるさん

そんなかえるいっこないさ そんなかえるいっこないさ

楽器をえんそうするかえるさん

みんなそろってかえるの歌をうたうかえるさん

そんなかえるいっこないさ

クロールで泳ぐかえるさん

バタフライや背泳ぎで泳ぐかえるさん

そんなかえるいっこないさ そんなかえるいっこないさ

ほんと！ でもそんなかえるさん なぜいないんだろ！

みみず

五班みんな

きれいなもようの

十メートルもあるみみずさん

そんなみみずさんみたことないさ そんなみみずさんみたことないさ

ゾウとクジラで満員の

そりをひっぱるみみずさん

そんなみみずさんみたことないさ

びよんぴよんとんで

いつしよになわとびをするみみずさん

そんなみみずさんみたことないさ そんなみみずさんみたことないさ

ほんと！ でもそんなみみずさん なぜみたことないんだろ！